

うつ病入院患者の自殺予防に関する研究 : 自殺リスクアセスメント指標構築のための初期的研究

著者	堀江 昌美
発行年	2006-09-06
URL	http://hdl.handle.net/10422/408

氏 名（本籍）	堀 江 昌 美（山口県）
学 位 の 種 類	修 士（看護学）
学 位 記 番 号	修 士 第 75 号
学位授与年月日	平成 18 年 9 月 6 日
学位論文題目	うつ病入院患者の自殺予防に関する研究－自殺リスク アセスメント指標構築のための初期的研究－

論文 内 容 要 旨

※整理番号	77	(ふりがな) 氏 名	ほりえ 昌美 堀江昌美
修士論文題目	うつ病入院患者の自殺予防に関する研究 —自殺リスクアセスメント指標構築のための初期的研究—		
<p>1. 研究の目的</p> <p>うつ病で入院している患者の自殺危険度を看護師が患者の日常行動からアセスメントする自殺リスクアセスメント指標の構築に向けて、うつ病患者の自殺を経験した看護師へのインタビュー調査から自殺危険度を把握するための視点を明らかにする。</p> <p>2. 方法</p> <p>研究デザイン：質的・帰納的研究</p> <p>うつ病で入院中の患者の自殺危険度を把握するための視点を包括的に収集することを目的として、半構成的面接調査を施行した。</p> <p>面接調査対象：精神科病棟勤務経験5年以上の看護師6名</p> <p>うつ病患者への看護経験があり、うつ病患者の自殺または自殺未遂の体験を持つ看護師で、自殺の体験を語っても業務に支障が出ないと管理者において判断し、かつ本人の承諾を得られた者。</p> <p>質問内容：開放病棟か閉鎖病棟か、看護師としての経験年数、精神科における経験年数および精神科以外での勤務経験年数、年齢。体験したうつ病患の自殺を踏まえ、うつ病患者の自殺の危険性をアセスメントするために重要と思う事柄（観察項目・着眼点・直観で感じたこと・おやと思ったこと・てがかりといったもの）について、自殺予防に役立った体験を具体的に尋ねた。</p> <p>期間：データ収集：2005年6月17日～9月29日</p> <p>分析方法：KJ方の手法を取り入れた帰納的分析</p> <p>倫理的配慮：データ収集や処理などにおけるプライバシーの保護、研究参加者の自由意志の尊重、研究参加者のリスク、研究参加者への悪影響が生じた時の対応、研究論文の公開について配慮することを口頭と書面で確認し、また本学の倫理委員会において承認を受けた。（承認番号 17-1）</p> <p>3. 結果</p> <p>うつ病で入院している患者の自殺危険度を把握するための視点として、うつ病患者の自殺体験を持つ熟練看護師が語った内容から、【臨床的直観】、【情緒不安定性】、【患者を追い詰めている情報】、【意識的コミュニケーション】、【接した時の反応】、【症状経過】、【自殺念慮的言動】、【孤立状態】、【睡眠・活動における変化】の9の上位カテゴリー・25の中位カテゴリー・68の下位カテゴリーを抽出した。</p> <p>4. 考察</p> <p>得られた結果は、看護師の直観と経験的学習による視点・観察の視点・介入の視点・情報共有の視点の4つに大別された。臨床的直観は自殺危険度把握に有用であり、各観察の視点では、下位カテゴリーとして既存の教科書や報告にないきめ細かく具体的な内容が得られた。情緒的支援を送りながら信頼関係を築くことが自殺のサインを察知するために必要不可欠であることが示唆され、情報をチームで共有することも自殺危険度把握のために重要な視点であるという知見を得た。</p> <p>5. 総括</p> <p>これらの視点は、既存の報告と照合した結果、患者との関わりを通じて日常生活における入院患者の具体的な言動から自殺危険度を把握する指標の一部となりうるものであった。</p>			